

《原著》

0 歳児保育における保育士と母親に対する アタッチメントの連続性

近藤 清美

Continuity of Attachment Relationship between Infant–Mother and Infant–Caregiver in Day Care Center

Kiyomi KONDO

Abstract : This study examined continuity of attachment relationship between infant–mother and infant–caregiver in a day care center. Thirty two infants (21boys, 11girls) who enrolled the day care center before their first birthday participated in this study. Their mothers and caregivers in a day care center completed two questionnaires separately about attachment relationship with themselves (Attachment Behavior Scale) and their perceived infants’ temperament (IBQ–R). The results indicated that maternal attachment influenced infant–caregiver attachment relationship especially when infants enrolled a day care center after infant–mother attachment was established. A model made from the results suggests that infant’s secure attachment relationship with his/her mother promotes dependency on and proximity to caregivers in a day care center and such dependency makes the base for secure attachment with the caregivers.

Key words : アタッチメント (attachment), 保育所 (day care center), 保育士との関係 (infant–caregivers relationship),

はじめに

1, わが国の 0 歳児保育^{注1}の状況

近年, わが国の少子化の勢いはとどまることを知らず, 父母の働き方の見直しや保育所を初めとする子育て支援政策の充実が言われている。2008 年 8 月に出された厚生労働省・労働政策審議会の「仕事と家庭の両立支援策の充実について」において, 保育所定員は前年度より 1 万 5 千人増加して 212 万人 1 千人と報告されている。そのうち, 21.0% が 3 歳未満児であり, 0 歳児の占める割合は 8.1%, 68,189 人となっている。近年のわが国の年間出生数が約 110 万人 (厚生労働省, 2004) であることを考えると, 出生した乳児の 6.2% が生後 1 年未満から保育所で養育されていることになる。

社会福祉法人保育協会が行った 2007 年の調査「保育所における低年齢児の保育に関する調査研究」では 3 歳未満児の保育の実態が明らかにされた。調査対象となった全国 1161 保育所の内, 67.4% が 0 歳児を受け入れており, その割合は人口の多い都市部で多かった。受け入れ規模として, 1～5 人が 35.6%, 6～10 人が 31.8% で, 11～20 人が 12.6% で, 0 歳からの保育希望がかなり多いことが分かる。これらの保育所の内, 産休明け (生後 8 週) から受け入れている保育所は 24.7% で, 生後 6 ヶ月からの受け入れは 19.5% であった。このようにわが国では 0 歳児保育が広く行われており, 受け入れ時期もかなり早期である。一方, 0 歳児保育の人員配置として, 保育協会の調査では, 正規雇用職員のみで構成されている保育所は 23.2% であり, 7 割以上はパートの保育士が保育の主要な部分を担っていた。また, こ

の時期の子どもには特定の養育者による養育が望ましいとされているにもかかわらず担任制は38.7%しか実施されていなかった。さらに、3歳未満児でも65.1%が延長保育を受けており、正規の8時間保育を受けているのはわずかに13.4%という実状であった。これでは、たとえ乳児3名に対して保育士1名の配置基準が設けられていても、一人の乳児は1日の内に様々な保育士と出会い、複雑なシフトの中で不安定な養育環境の中で保育をうけていることになる。また、長時間保育のため、実質的に乳児が家庭で父母と接触する時間よりも保育所で保育士と接触する時間の方が長いということが生じている。こうしたことが、0歳児保育を受けた子どもの発達にどのような影響を及ぼすのかは重要なテーマといえるだろう。

2. 複数の養育者に対するアタッチメント

Bowlby (1969/1982) が提唱するアタッチメントは、生後8ヶ月頃までに特定の対象との間に形成される情緒的絆で、生存を脅かす危機的場面で活性化され、乳児が養育者を危機からの避難所として利用すると共に、外界探索のための安全基地として利用するための行動システムである。さらに、子どもが発達して表象を持つようになると、初期の関係性が内的作業モデルとして表象化され、自己意識を含めて様々な発達側面に影響するようになると考えられている。

アタッチメント研究の初期から、子どもが複数のアタッチメント対象を持つことは知られていた (Ainsworth, 1969; Schaffer & Emerson, 1963)。例えば、母親と父親それぞれに対するアタッチメントの差違はもっとも早くから研究され、それぞれの親に対して異なるアタッチメントを持つことが示された (Main & Weston, 1981; Belsky & Rovine, 1987)。これは、養育者の感性に依りて乳児はそれぞれの対象に異なるアタッチメントを形成することを示し、アタッチメントを関係性としてとらえると当然の結果と見なされた。ところが、その後、様々な議論が積み重なり、母親と父親に対するアタッチメントはほどほどの一致率

を見せることがメタ分析でわかった (Fox, Kimmerly & Shafer, 1991)。その理由として、両親が同じ子育て態度を持っていたり、子どもの気質が親の養育に影響することで同じようなアタッチメントを形成するという説明がなされた。しかし、母親と父親へのアタッチメントを乳児のアタッチメントに関する内的作業モデルが媒介すると考えることも出来る。Bowlby (1969/1982) の理論に従えば、乳児は“単向性 (monotropy)” をもち、利用可能性に依りて養育者を階層化し、特定の対象にアタッチメントを形成する。アタッチメント関係に単向性があることは、危機的場面で利用する対象に迷うことがなく、多数によって世話に手抜きが生じることがないという生存価があると言える。また、社会生物学的に考えるなら、子育てへの投資は遺伝的つながりが限り生存価が生ぜず、遺伝的つながりの程度や、つながりの確かさの程度に依りて世話的投資が行われ、それに依りて乳児が特定の対象にのみアタッチメントを向けるということになる。通常の養育環境では、母親が一番遺伝的つながりが確かであり、単向性を向ける対象として選ばれる。Steele, Steele & Fonagy (1995) が示したように、母親のアタッチメントに関する内的表象は母子関係ばかりか父子間のアタッチメントにも関連していた。このことは、乳児が単向性を持ち、母子関係で形成された内的作業モデルをその他の関係性への鋳型に利用していることの証拠と考えられるだろう。

さらに、母親以外の専門的保育者とのアタッチメントに関するメタ分析 (Ahnert, Pinquart & Lamb, 2006) でも、母親と保育者へのアタッチメントには弱い関連があった。また、子どもへの感性が保育者とのアタッチメントの安定性と関係した。専門的保育者とのアタッチメントについては、Howesらが精力的に一連の長期縦断研究を行っているが、彼女らの研究では、保育者に対するアタッチメントは母親に対するものとは独立しており、同じような文脈にある友達や教師との関係性には影響を及ぼした (Howes, Matheson & Hamilton, 1994; Howes, Hamilton & Philip-

sen, 1998), アタッチメントに関する内的作業モデルが文脈毎に独立して形成され, 文脈特異的に影響を及ぼすとされた. また, イスラエルのキブツでのSagi-Schwartz & Aviezer (2005) の長期縦断研究でも保育者との関係が後の仲間関係と関連することが示されたが, 両親とのアタッチメントを加味して統合的モデルとしてアタッチメントを考えた方が後の発達への予測性が高かった. 複数のアタッチメント対象に形成されたアタッチメントがどの程度独立しているのか, また, 独立して形成されるなら, 複数のアタッチメントに関する内的作業モデルがどのように一つにまとまっているのか議論となるが, この点については今後の研究を待つ状態である.

保育所研究以外に, 親とのアタッチメントと親以外の専門的保育者とのアタッチメントの関係を明らかにする研究として養子研究があげられる. この場合, 親との関係を切った後に子どもは新たな養育者を迎えることになるに伴い, 虐待やネグレクトによる親との問題のある関係性の影響も考えに入れなければならない. Stovall & Dozier (2000) は里親にアタッチメント行動に関する日誌を求めた. その結果, 生後1年未満に措置された養子は, 1, 2週間の内に里親に特定のアタッチメント行動を向けるようになるが, 生後1年以降では, 2ヶ月たってもアタッチメント行動を向けないことがあり, 親との問題のある関係性の影響が見られた. しかし, Dozier, Stovall, Albus & Bates (2001) によると, 養子に出された時期にかかわらず, 成人愛着面接で測定された里親のアタッチメント表象と養子のアタッチメントパターンは一致した. また, アタッチメント障害を示している子どもをのぞけば, アタッチメントの安定性は里親の敏感性と関連していた (Oosterman & Schuengel, 2008). このようにアタッチメント障害を負うほどひどい養育を受けない限り, 初期の問題のあるアタッチメント関係は, 後に出会う養育者との関係性の中で作り替えられると言える. もっとも, それはアタッチメントが形成される1年未満の方がうまくいくようである.

以上のように, 母親とのアタッチメントと母親以外の保育者とのアタッチメントは, 基本的には, 保育者の感性やアタッチメント表象に応じて独立して形成されるが, 子どもに内的作業モデルが形成されると以前のアタッチメント関係を新たな関係に持ち込み, それと似たような関係を新たな保育者と結ぶことになると言える.

3, わが国の保育所児のアタッチメント研究

わが国においても保育所に子どもを預けることで生じると考えられる母子関係の問題については古くから研究されてきた (e.g. 繁多, 1983). この問題については, National Institute of Child Health and Human Development (NICHD) の大規模調査 (NICHD Early Child Care research Network, 2005) で保育所入所そのものが母子間のアタッチメントに悪影響を及ぼすことはないことが明らかとなった. 不思議なことにわが国ではこの問題について近年, あまり議論されていない. わが国の保育は, 欧米には比べると長時間であり, 母親の労働条件も厳しく, 欧米とはかなり事情が異なると考えられる. NICHDと同じ結論が導けるかどうかは疑問であり, 研究が求められるテーマであるといえる.

一方, 保育士とのアタッチメント関係は近年, 注目されている. 2001年には日本保育学会で「保育者—子ども間の愛着の測定と保育臨床」のテーマで自主シンポジウムが行われ, 保育士とのアタッチメントを測定できる実用的な方法が考案されている. また, 保育士とのアタッチメント形成過程についての記述的研究も散見される (e.g. 上田, 2003). この背景には, 近年, 家庭での養育環境が急激に変化して親の「育児力」の低下が言われる中, 「子育て支援」の中核的な役割を保育所が担うようになってきたことと関係があるだろう. たとえ, 親とのアタッチメントがうまく形成されなくても, 保育士とのアタッチメント関係の中でそれが修復され, 翻って, 親子関係によい影響を及ぼすことができれば, 「子育て支援」として保育所は重要な働きを果たすことになる. ま

た、問題となる親子関係が保育現場で保育士との関係に再現され、「気になる子ども」としての行動を呈している場合もあり（早坂，2007），保育士と子どもの関係性は保育臨床での重要な観点と言える。

このような背景をふまえて，本研究では，母親へのアタッチメントと保育士へのアタッチメントの連続性について検討を試みる。

方 法

研究対象児：

生後12ヶ月未満から保育所（5カ所）に在籍する子ども，32名が研究の対象者である。男児は21名，女児11名で，第一子は12名であった。入所月齢は生後2ヶ月から11ヶ月であり，そのうち15名（47%）は，母親とのアタッチメントが形成され则认为られる生後7ヶ月以前に保育所での保育が開始された。保育時間の1日あたりの平均は9.0時間（7.5–11.0）で，17名（53.1%）が延長保育を利用していた。また，12名（37.5%）が週6日の保育を受けていた。さらに，6名（18.8%）の子どもが保育所以外に祖母などの家で二重保育を受けていた。

母親の年齢の平均は31.7歳，父親の年齢の平均は33.6歳であった。母親の教育年数の平均は13.9年，父親の教育年数の平均は13.3歳であった。また，17名（53.1%）の母親がフルタイムで働いていた。父母の年齢や教育年数は乳児を持つ父母の全国的な平均とほぼ等しいといえる。

手続き：

保育士と母親に対して，ほぼ同時期に，2回の質問紙調査が行われた。

1回目は愛着行動尺度（安治，1998）を用いて，保育士に対するアタッチメントは保育士に，母親に対するアタッチメントは母親に回答を求めた。配布回収は，子どもが1歳から1歳4ヶ月の間に行われた。

2回目は乳幼児気質質問紙（IBQ-R：Infant Behavior Questionnaire-Revised, Garstein & Roth-

bart, 2003；中川・楢柄，2005）を用いて，保育士と母親それぞれに子どもの気質について回答を求めた。配布回収は，子どもが1歳3ヶ月から1歳6ヶ月の間に行われた。

尺度：

愛着行動尺度 この尺度は，アタッチメントQ分類法（Waters & Deane, 1985）の全90項目から，特にアタッチメントの安定性に関連するとしてHowes & Smith（1995）が抽出した26項目から成り立っている。安治（1998）によって1,198名の1歳から6歳の保育所児の親を対象とした調査で信頼性と妥当性が確立された。各項目について，「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5段階の評定がなされる。安治（1998）に従い，1）安全基地行動，2）接近・接触，3）従順，4）不信・回避の下位尺度が算出された。本研究では，これに加えて，アタッチメント得点と依存性得点を算出するために，アタッチメントQ分類法のアタッチメントと依存性の標準得点との相関係数がそれぞれアタッチメント得点，依存得点として算出された。

乳幼児気質質問紙（IBQ-R） IBQ-RはRothbartの気質理論に基づいて作成されたものであり，乳児期から成人期にわたって測定できるように各発達段階に応じて質問紙が作成されている。本研究では乳児版の中川・楢柄（2005）によって翻訳されたものを用いた。各項目は乳児の様々な生活場面における行動について，「いつも見られる」から「全く見られない」までの7段階の評定がなされ，当該の生活場面が該当しない場合は「あてはまらない」と評定された。この尺度には14の下位尺度があるが，結果はそれらをまとめた因子尺度合成について，1）高潮性，2）否定的情動性，3）調整の得点が算出された。

結 果

1，性，保育開始月齢，保育時間による差違

アタッチメント得点や依存性得点，愛着行動尺度，気質尺度において，性や第一子かどうか，標

準保育時間より長い保育時間かどうかの差異は見られなかった。一方、保育開始月齢を7ヶ月以前の早期群とそれ以降の後期群に分けてU検定を行うと、後期群は早期群に比べて保育士とのアタッチメント得点が高く、従順の得点が高かった。また、保育士が評定した気質尺度で否定的情動性は早期群で得点が高かった (Table 1)。母親の評定にはそうした差はいずれの尺度にも見られなかった。

2, 保育士と母親の評定の差違

同じ子どもについて、保育士と母親の評価に差違があるかどうかを検討した (Table 2)。その結果、アタッチメント得点そのものには有意な差違がみられなかった。一方、保育士よりも母親が依存性を高いと評価し、母親より保育士の方が子どもが従順であると評価していた。気質尺度には差違は見られなかった。

3, 保育士と母親へのアタッチメントの関係

保育士と子ども、母親と子どものアタッチメント得点と愛着行動尺度の関連性を検討した (Table 3)。その結果、保育士と母親のアタッチメント得点は有意な相関をみせ、しかも、母親のアタッチメント得点は、保育士との愛着行動尺度の安

全基地行動や接近・接触と有意な相関を示した。また、保育士のアタッチメント得点は母親との安全基地行動と有意な相関を見せ、母親の安全基地行動と保育士との不信・回避は有意な負の相関を示した。一方、気質については保育士の評定した調整と母親の評定した高潮性で $r = -.435$ の有意な負の相関が見られた。

4, 保育士と母親へのアタッチメントの規定要因

保育士と母親それぞれへのアタッチメントが保育士と母親それぞれが評定する依存性や気質に規定されているどうかを検討するために重回帰分析を行った。その結果、保育士に対するアタッチメントは、依存性や気質の高潮性、調節に有意な関連があることが分かった ($R^2 = .795$, 標準化係数: 依存性 = .679, 高潮性 = -.361, 調節 = .420, いずれも5%水準で有意)。一方、母親に対するアタッチメントは依存性にも気質にも関連しなかった。

5, 保育士と母親へのアタッチメントの一致度とそれぞれへのアタッチメント

保育士と母親へのアタッチメントの差違の絶対値とそれぞれのアタッチメント得点との相関を求めたところ、保育士に対するアタッチメントで

Table.1 保育開始月齢による差違 (対保育士に対して)

	早期群 (7ヶ月以前)	後期群 (8ヶ月以降)	
アタッチメント得点	.206	.328	*
依存性得点	.169	.237	
愛着行動尺度			
安全基地行動	5.59	4.73	
接近・接触	23.5	25.6	
従順	20.5	24.2	*
不信・回避	18.1	17.9	
気質			
高潮性	4.85	4.88	
否定的情動性	.481	.176	*
調整	4.73	5.28	
Mann-WhitneyのU検定			* $p < .05$

Table.2 保育士と母親の評定の比較

	保育士	母親	
アタッチメント得点	.324	.397	
依存性得点	.205	.307	*
愛着行動尺度			
安全基地行動	5.18	6.14	
接近・接触	24.6	25.6	
従順	22.7	20.7	*
不信・回避	18.0	17.2	
気質			
高潮性	4.86	5.07	
否定的情動性	.344	.331	
調整	4.93	4.86	
Wilcoxon の符号付き順位検定			* $p < .05$

は、 $r = -.588$ で1%水準の強い相関を見せた。一方、母親に対するアタッチメントでは、 $r = -.293$ で有意な相関は見られなかった。保育士に対するアタッチメントが安定しているほど、保育士と母親へのアタッチメントが一致しているという結果であった。

6, 保育士と母親へのアタッチメント得点の高低による差違

アタッチメント得点の中央値によってアタッチメント得点高群と低群に分け、保育士と母親のアタッチメントの他方の関係性における差違を調べた。その結果、保育士に対するアタッチメント得点の高低には母親へのアタッチメント得点や愛着行動尺度、依存性に有意な差違は見られなかった。

Table.3 保育士と母親のアタッチメント得点と愛着行動尺度でのPearson相関

	保育士				
	アタッチメント得点	安全基地行動	接近・接触	従順	不信・回避
母親					
アタッチメント得点	.522**	.377*	.393*	.182	-.334
安全基地行動	.422*	.321	.310	-.010	-.407*
接近・接触	.316	.341	.179	.057	-.209
従順	.336	.301	.303	.200	-.019
不信・回避	-.285	-.172	-.238	-.169	.150

* $p < .05$

が、母親に対するアタッチメント得点の高低には保育士に対する行動で有意な相関が幾つか見られた (Table 4)。つまり、母親に対するアタッチメント得点が高いほど、保育士に対して高いアタッチメントを示し、アタッチメント行動も多く、依存的であった。

7, 保育開始時期による保育士と母親へのアタッチメントの一致度の差違

アタッチメントが形成される以前 (生後7ヶ月以前) に保育を開始された場合と、それ以降の場合とに分けて、保育士と母親のアタッチメント得点のスピアマンの順位相関を算出した。その結果、生後7ヶ月以前で保育が開始された群では $r = .313$ であり、それ以降に開始された群では $r = .634$ と有意な強い相関が示された。

考 察

保育士に対するアタッチメントは母親に対するものと比べて不安定であるという知見 (Ahnert et al., 2006) に反して、本研究の0歳から保育を受けた子どもの保育者へのアタッチメントは母親に対するものとなんら異なることはなかった。ただし、保育士に対しては母親よりも従順であり、独立していた。これは、近藤 (2007) が独立したサンプルで保育所児と家庭児のアタッチメントを比較した結果と共通するものである。0歳児保育においても、子どもは家庭におけるのと同じように

Table.4 アタッチメント得点の高低による他方の関係性での差違

	保育士		母親		
	高群	低群	高群	低群	
	母親に対して		保育士に対して		
アタッチメント得点	.48	.31	.455	.156	*
依存性得点	.340	.280	.324	.054	*
愛着行動尺度					
安全基地行動	6.92	5.53	7.21	2.78	*
接近・接触	26.2	25.2	25.9	22.8	*
従順	22.0	19.4	22.9	22.3	
不信・回避	16.85	17.40	17.2	18.8	
Mann-WhitneyのU検定					* $p < .05$

養育者に対して安定したアタッチメントを形成することができると言えよう。しかしながら、母親とのアタッチメントが形成される以前に保育を開始した場合、保育士との関わりの歴史が長いにもかかわらず、Ahnert et al. (2006) の結果とは異なり、母親とのアタッチメントが形成された後に保育を開始された場合と比べて、アタッチメントは不安定であった。

本研究で明らかにされた保育者に対するアタッチメントは、母親に対するアタッチメントとは異なり、依存性や気質と関連した。アタッチメントと依存性の関係は、1970年代のアタッチメント研究での論争点であり、単なる行動の生起頻度ではなく、アタッチメントを行動の組織化としてとらえることによって、アタッチメントと依存性は独立した概念であることが示された (Sroufe & Waters, 1977)。一方、気質とアタッチメントの関係は現代にまで続く論争点であるが、養育環境によって生理的働きすらも影響を受けることが示され (Fox & Hane, 2008)、アタッチメントと気質がある部分では重なることが分かっている。しかし、もっぱら気質がアタッチメントパターンを決定するという見解には否定的である (Vaughn & Bost, 1999)。本研究での保育士に対するアタッチメントの評価に依存性や気質が関連していることについて、一つの可能性として、保育士が子どもの行動を詳細に観察していないので依存的な行

動をアタッチメント行動と間違っているとらえたということが考えられる。しかし、保育所場面では、保育士に近接を示し、何かと頼ってきたり、泣いてもすぐにだまり、たいてい気持ちよく過ごせていることがアタッチメントの安定性を示す行動と共通するという文脈に特異的な特徴と考えることも可能である。近藤 (2007) が示したように、保育所児のアタッチメントの安定性は家庭児と同じであっても、使用されるアタッチメント行動には差違があった。保育場面では、依存性や機嫌の良さ、情動の安定がアタッチメントの安定性と共通する行動ととらえられたようである。

本研究での重要な結果は、保育士へのアタッチメントと母親へのアタッチメントに強い関連が見られたことである。ただし、この関連性は母親とのアタッチメントが形成されたと考えられる8ヵ月以降に保育を開始された子どもに顕著に見られた。このことは、母親とのアタッチメント関係で形成された内的作業モデルを用いて保育士とのアタッチメントを形成したことを示すもので、Bowlby (1969/1982) の鋳型説を支持する結果である。もっとも、そのつながりに子どもの気質が関与している可能性も指摘したい。

本研究から示唆される両者の連続性をFigure 1に模式的に示した。本研究の結果から、母親とのアタッチメントが安定しているほど、子どもは保育者も信頼できる大人として依存性を示し、安全

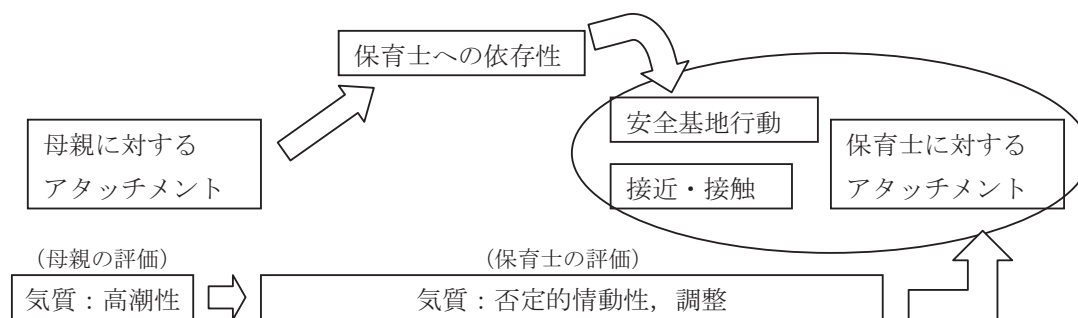


Fig.1 保育士と母親のアタッチメントの連続性のモデル

基地行動や接近・接触を取るようになる。このことがひいては保育者との安定したアタッチメントに結びつくと考えられる。子どもの気質は、母親に対するアタッチメントとは関係しないが、保育士が受けとる子どもの気質として間接的に影響を及ぼすと考えられる。

さらに、保育士とのアタッチメントが安定しているほど、保育士と母親へのアタッチメントの一致度が高いことが示された。つまり、母親と安定したアタッチメントを形成した子どもは保育士にも安定したアタッチメントを示すようになるが、保育士へのアタッチメントが不安定な子どもには、母親とのアタッチメントが不安定な子どもも含まれる一方で、母親とのアタッチメントが安定していたにもかかわらず、保育士とでは安定したアタッチメントが形成できなかった子どもも含まれていることが分かる。こうした保育士と母親へのアタッチメントの連続性は、生後7ヶ月以前に保育を開始された子どもでは有意な相関ではなかった。この場合は保育士と母親に対するアタッチメントが同時並行に独立して形成されたと考えられる。

これまでの母親以外の専門的保育者へのアタッチメントの研究の多くが、母親のアタッチメントとは独立して保育者へのアタッチメントが形成されるとしてきたが、本研究はそうではなかった。その理由は、これまでの研究では対象児の年齢が高く、0歳から保育を受けた乳児を対象としてこなかったことがあげられる。本研究では、まさにアタッチメントが形成されつつある時期に保育を開始された子どもを対象として、形成されたばかりの保育者とのアタッチメントを評価している。

そうした時期だからこそ、母親とのアタッチメントの影響が色濃く見られたと言えるだろう。また、母親と保育士双方のアタッチメント形成に子どもの気質が関与した可能性も否定できない。子どもがさらに成長すれば、母親と不安定なアタッチメント関係を持った場合も、新しい養育者との出会いの中で、内的作業モデルの改訂が起こり、安定したアタッチメントを形成する事も生じるだろう。

最後に、本研究の知見から、0歳児保育では保育士と子どもとの関係性に母子関係の影響が反映されることに配慮しなければならないことが示された。不安定なアタッチメントを母親と形成した子どもは、保育士に否定的な行動を取ったり、依存性を示さないことが考えられる。そうした場合に、保育士は子どもの行動に巻き込まれることなく、子どもの信号に敏感に対応することで母親とは異なるアタッチメントを形成できる可能性がある。また、母親とのアタッチメントを形成する以前に保育を開始される子どもでは、アタッチメントの形成は保育士との間でも同時並行として生じ、保育士は子どものアタッチメントに関する内的作業モデル形成の重要な役割を果たすことを忘れてはいけない。今後の課題として、具体的に保育者のどのような行動が安定したアタッチメントを形成することになるのかを解明することが求められる。

本研究は、平成16年度日本学術振興会・科学研究費（基盤研究（c）課題番号1753082：研究代表者池邨（近藤）清美）の助成を受けた。本研究に参加協力していただいた保育所と赤ちゃん、ご両

親に心より感謝いたします。また、國學院短期大学の草薙恵美子先生には気質尺度の分析をお願いしました。ここに記してお礼を述べます。

注1 本研究では生後1年未満に保育を開始された場合を「0歳児保育」としている。通常、この時期の保育は「乳児保育」と呼ばれるが、「乳児」の定義が曖昧であるため、本論文では「0歳児保育」の言葉を用いた。

引用文献

- Ahnert, L., Piquart, M., & Lamb, M. E. 2006 Security of children's relationships with nonparental care providers : A meta-analysis. *Child Development*, 77, 664-679.
- Ainsworth, M. D. S. 1963 The development of infant-mother interaction among the Ganda. In B. M. Foss (Ed.) *Determinants of infant behaviour (Vol.2)*. New York : Wiley. 67-112.
- Ainsworth, M. D. S., & Witting, B. A. 1969 Attachment and exploratory behaviour of one-year-olds in a Strange Situation. In B. M. Foss (Ed.) *Determinants of infant behaviour (Vol. 4)*. Methuen. 113-136
- 安治陽子 1998 幼児期における愛着の組織化と社会的適応—漸成的組織化は可能か—東京大学大学院教育学研究科修士論文
- Belsky, J., & Rovine, M. 1987 Temperament and attachment security within the Strange Situation : An empirical rapprochement. *Child Development*, 58, 787-795.
- Bowlby, J. 1969/1982 *Attachment and loss, Vol.1, Attachment*. Basic Books
- Dozier, M., Stovall, C., Albus, K., & Bates, B. 2001 Attachment for infants in foster care : The role of caregiver state of mind. *Child Development*, 72, 1467-1477.
- Fox, N. A., & Hane, A. A. 2008 Studying the biology of human attachment. In J. Cassidy & P. Shver (Eds.) *Handbook of attachment*. 217-240. New York : Guilford.
- Fox, N. A., Kimmerly, N. L., & Schafer, W.D. 1991 Attachment to mother/attachment to father : A meta-analysis. *Child Development*, 52, 832-837.
- Garstein, M. A., & Rothbart, m. K. 2003 Studing infant temperament via the Revised Infant Behavior Questionnaire. *Infant Behavior and Development*, 26, 64-86.
- 繁多進 (1983). 保育園児および家庭児のアタッチメントの発達に関する研究. 周産期医学, 13号, 臨時増刊号「母子相互作用—周産期医学から見た育児の原点—Pp. 2213 - 2217.
- 早坂佳恵 2007 保育園における「気になる子」の行動及び保育士の対応についての臨床心理学的考察—アタッチメント理論の視点より—北海道医療大学大学院心理科学研究科修士論文
- Howes, C., Hamilton, C. E. & Philioen, L. C. 1998 Stability and continuity of child-caregivers and child-peer relationships. *Child Development*, 69, 418-426.
- Howes, C., & Matheson, C. C., & Hamilton, C. E. 1994 Maternal, teacher, and child care history correlates of children's relationships with peers. *Child Development*, 55, 257-273.
- Howes, C., & Smith, E. W. 1995 Children and their child care caregivers : Profiles of relationships. *Social Development*, 4, 44-61.
- 厚生労働省 2004 人口動態調査
- 厚生労働省労働政策審議会 2008 仕事と家庭の両立支援策の充実について <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/12/h1225-8.html>
- 近藤清美 2007 保育所児の保育士に対するアタッチメントの特徴—母子関係と比較して—北海道医療大学心理科学部研究紀要 第3号, 13-24.
- Main, M., & Weston D. 1981 The quality of the tod-

- dler's relationship to mother and to father : Related to conflict behavior and the readiness to establish new relationships. *Child Development*, 52, 932-940.
- 中川敦子・鉄柄増根 2005 乳児の行動の解釈における文化差はIBQ-R日本版にどのように反映されるか. 教育心理学研究, 55巻, 491-503.
- NICHD Early Child Care Research Network (Ed.) 2005 *Child Care and Child Development*. New York : Guilford press
- Oosterman, M., & Schuengel, C. 2008 Attachment in foster children associated with caregivers' sensitivity and behavioral problems. *Infant Mental Health Journal*, 29, 609-623.
- Sagi-Schwartz, A., & Aviezer, O. 2005 Correlates of attachment to multiple caregivers in kibbutz children from birth to emerging adulthood : The Haifa longitudinal study. In K. E. Grossmann, K. Frossmann, & E. Waters (Eds.) *Attachment from infancy to adulthood : the major longitudinal studies*, New York : Guilford Press. 165-197.
- Shaffer, H. R., & Emerson, P. E. 1964 The development of social attachment in infancy. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 29 (3, Serial No.p4), 1-77.
- 社会福祉法人保育協会 2007 保育所にける低年齢児の保育に関する調査研究報告書
- Sroufe, L. A., & Waters, E. 1977 Attachment as an organizational construct. *Child Development*, 48, 1184-1199.
- Steele, H., Steele, M. & Fonagy, P. 1995 Associations among attachment classifications of mother, father, and their infants. *Child Development*, 57, 571-555.
- Stovall, K.C., & Dozier, M. 2000 The development of attachment in new relationships : Single subject analyses for 10 foster infants. *Development and Psychopathology*, 12, 133-156.
- 上田七生 2003 乳児と保育者とのアタッチメント関係の形成および変容過程 広島大学大学院教育学研究科紀要第3部教育人間科学関連領域 51巻, 359-363.
- Vaughn, B. E., & Bost, K. K. 1999 Attachment and temperament : Redundant, independent, or interacting influences on interpersonal adaptation and personality development. In J. Cassidy & P. Shver (Eds.) *Handbook of attachment*, 198-225. New York : Guilford.
- Waters, E. & Deanes, K. E. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships : Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters. (Eds.), *Growing points in attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development (Vol.50), 41-65.